

池上嘉彦著「第II章 伝えるコミュニケーションと読みとるコミュニケーション－伝達をめぐって」『記号論への招待』、岩波新書、1984年、pp.57.-64.

要約

【今回の範囲の大まかな内容】

第II章では問題提起の背景として、まずコミュニケーションの型が2つの系列によって特徴づけられるものとして分類された。

- 1). 「コード依存」－「解説」－「発信者中心」 2). 「コンテキスト依存」－「解釈」－「受信者中心」(p.50)

この分類から、前者の極限的な場合として「理想的」なコミュニケーションであることが確認された上で、それでは一体、後者の極限的な場合はどうなるのか？との問題が考察されることになる(p.50)。そして、本日の部分では、結論として、それが、「理想的ではない」型であり、また、人間生活に広く行われる「推論」に基づくものであり、その推論からは、新しい「コード」が仮説的に提案されることになることが示される(p.57)。そのコミュニケーションは、内側へ「閉じた回路」を外に開き、既成のコードを改変する力を秘めた、本質的に、主体的判断に基づく「人間的」な性格のものである(p.62)。

【各節の内容】

■ 「『ことわざ』の場合」と 「『迷信』の場合」(pp.57-59)

ここでは、〈コードに基づいた「解説」〉(=前者)と〈仮説的に提案された「新たなコード」に基づく「解釈」〉(=後者)の両者が考察される。それらの間には明確な境界線はなく、仮説であった「新たなコード」が「既成のコード」へと移行するなど、相互に関連をもつものである。それは「ことわざ」や「迷信」に見い出すことができることが示される。

- ▼ 〈コードに基づいた「解説」〉(=前者)と〈仮説的に提案された「新たなコード」に基づく「解釈」〉(=後者)とは相互に関連をもつ在り方を見せる。それは「ことわざ」や「迷信」に見い出すことができる。

- 「ことわざ」や「迷信」が基づいている「コード」とは推論によって、いわば〈仮説形成〉されたものである。
- この、仮説形成された「コード」には、妥当性において問題があり、単に「蓋然性が高い」程度である。
- しかし、その「ことわざ」や「迷信」を信じる人にとっては、自らを強く拘束する「コード」となる。
- つまり、信じる人にとっては、仮説のコードは、既に「既成のコード」へと移行していることになる。

■ 「探偵や医者 の推論」 (pp.59-60)

ここでは「コンテキスト依存」-「解釈」-「受信者中心」として特徴づけられた「理想的ではない」コミュニケーションでは、その「解釈」の過程で「推論」の操作を用いることが確認された上で、それが、「人間の生活においてきわめて広く行われていること」が示される。そのことで、「記号論の対象の範囲」がきわめて広いことも示される。

- ▼ 「探偵」や「医者」にみるように、人間の生活においては、職業的・専門的「推論」は広く行われている。
 - 探偵は「落ちてい一本の髪から、いろいろなことを読み取る」
 - 医者は患者にみられる「さまざまな徴候」を手がかりにして、「病気」を推測する
- ▼ 「探偵」や「医者」が行うこのような「推測」もまた、記号論が対象とする議論の範囲のものである。

■ 「『仮説的推論』」 (pp. 60-61)

ここでは「コンテキスト依存」-「解釈」-「受信者中心」として特徴づけられた「理想的ではない」コミュニケーションが、「仮説的推論」と呼ばれる「推論」の方法を用いることが示される。その際、他の「推論」方法である「演繹」と「帰納」との比較で示される。

- ▼ 先にみた「探偵」や「医者」のような「推論」は、われわれの日常レベルにおいても大きな役割を果たしている
 - 例). 朝の鳥のさえずりから、今日は良いことがあることを信じる (c.f. p.54,)
 - 例). 明るい色のドレスを着ていることから、その人はなやいだ気分を読み取る (c.f. p.54)
 - 例). 〈落葉〉という「事例」から、〈秋には落葉する〉という「規則」が参照され、〈秋になった〉ことが「帰結」される (※「事例」「規則」「帰結」については c.f. p.55-56)。
- 【重要】 このような種類の「推論」の方法は、「仮説的推論」と呼ばれる。
- ▼ 「仮説的推論」 abduction は、「演繹」 deduction や「帰納」 induction と同様に論理的推論の方法として分類されるもの
- ▼ 「演繹」 deduction とは
 - まずは「規則」 (= code) を前提とする。それに基づき一つの「事例」から、ある「帰結」を推論して引き出す (c.f. p.61)。
 - 例). 〈風が吹くと葉が散る〉という「規則」を前提とする。そこから 〈風が吹いている〉という事例から、〈葉が散る〉という「帰結」を推論する。
- ▼ 「帰納」 induction とは
 - まずは「事例」と「帰結」が与えられていて、そこから「規則」 (= code) を推論して引き出す (c.f. p.61)。
 - 例). 〈風が吹く〉という「事例」と 〈葉が散る〉という「帰結」が与えられている状態から、〈風が吹くと葉が散る〉という「規則」を推論する。

▼「仮説的推論」abductionとは（注1）

- まずは「帰結」（注2）が与えられていて、そこから仮説的な「規則」に基づいて「事例」（注3）が推測される。
→ 例). 〈葉が散る〉という「帰結」が与えられていて、そこから〈風が吹くと葉が散る〉という仮説的な「規則」に基づいて、〈風が吹いている〉のかな？ という「事例」の存在を推測する。

※ ただし、本レジュメの（注1）にみるように、「仮説的推論」には、その真理性にはなんらの論理的保証はない。つまり、疑わしいのである。例えば、上記の例でも、〈葉が散る〉という帰結を導くのは、〈風が吹く〉という「事例」に限ることではない。つまり、〈人が枝から落とした〉という事例などもすぐに推測できる。

※ 上記の「仮説的推論」の説明は、「帰結」を最初にあげている点で、本文61頁の記述とは異なるが、しかし、池上氏の大意とは上記の説明の通りと考える。なぜなら、55頁 - 56頁において、記号現象と平行する推論の解説がなされている部分においては、上記の発表者による説明と同じ構造が示されているからである。

（注1）：「仮説的推論」abduction は、「仮説形成」とも呼ばれることがある。これは記号学者 C.S. パース (1839-1914) によって科学的探究の方法の一つとして定式化されたもの。パースは、「仮説的推論」を「演繹」や「帰納」と並ぶ第三の推論方法として提唱した。パースの科学方法論では、ある仮説の必然的帰結を確定するところの「演繹」と、この演繹的な帰結が観察事実といかに近似しているかを検証するところの「帰納」とに先立って、それまで説明の与えられていない不規則的現象 (= 「事例」 = 理由) のうちに一つの仮説的秩序を見出す過程としての「仮説的推論」が遂行されるとされる。これは所与の現象を有意味で合理的な全体として把握するために、その現象を仮構的に解釈しようとする過程である。一方、その真理性には何らの論理的保証はない。しかし、その合理性を完全に否定することは科学的知識全体を不合理なものに帰着させることになると思われる。（参考文献：「アブダクション」『岩波哲学・思想事典』）

（注2）： きけつ【帰結】consequence。広辞苑によれば以下の通り。
〔哲〕(consequence) 何らかの事態を原因として、それから結果として生ずる状態。または一定の論理的前提から導き出される結論。⇔ 理由。
「帰結」= 「結果」。したがって「事例 (= 理由)」→「帰結 (= 結果)」の図式となる。

（注3）： じれい【事例】case。広辞苑によれば以下の通り。
個々の場合における、それぞれの事実。
「事例」= 「理由」。したがって「事例 (= 理由)」→「帰結 (= 結果)」の図式となる。

■ 「『仮説的推論』と人間的なコミュニケーション」 (pp. 61-62)

ここでは、「理想的ではない」コミュニケーションの構造に見られる「仮説的推論」の操作が、人間の主体的な営みに基礎づけられるものであることが示される。推論によって提示される〈仮説的なコード〉とは、「文化のコード」を創り出す試みなのであり、それは、「理想的」コミュニケーションが機械的であったのに対して、この「理想的ではない」コミュニケーションが「人間的」なものであり、内側に閉じた「解説」が、外側に開かれた「解釈」を導くものとなる。

▼ 「仮説的推論」 (= アブダクション) における重要な含意とは？

→ 「この『仮説的推論』という操作は、人間が自分のまわりの出来事を自分との関連で捉え、それを自分を中心とする秩序の中で位置づけようとする主体的な営みの基礎にあるものだということ」 (c.f. pp. 61-62)。

▼ 提案された「仮説」 (= 新しいコード) は、既成のコードの中に組み込まれたり、取って変わったりする可能性がある。

▼ そのいみで、「仮説的推論」とは、「文化のコード」を創り出す試みである (c.f. p.62)。

▼ 「理想的」なコミュニケーションが内側に「閉じた回路」であれば、その閉じた回路をひらくのは「人間」である。「理想的ではない」コミュニケーションとは、「人間的」な性格をもち、閉じた回路を、外側に開く契機となりうる。

■ 「『意味』の意味」 (pp. 63-64)

ここでは、機械的な〈「理想的」なコミュニケーション〉と人間的な〈「理想的ではない」コミュニケーション〉との両者における、それぞれが含意する「意味」の違いが示される。それは、「意味論的な意味」と「実用論的(行為論的)な意味」の違いである。

▼ 「理想的」なコミュニケーションが含意するのは「意味論的な意味」である。

→ そこでは「指示物」=「意味内容」となる。その記号とその指示物が問題とされる(意味論的な意味, c.f. p.45)。

→ ※ (電話にて) 「大人：お父さん、いる？」 「子供：いるよ」 (※しかし、父に変わることはない)
子供はその言葉を文字通りにしか解釈しない = 「意味論的な意味」

▼ 「理想的ではない」なコミュニケーション (= 仮説的推論) が含意するのは「実用論的な意味(行為論的な意味)」である。

→ そこでは記号を使用する人間にとって「どういう意味となるのか」が問題となる。(実用論的な意味, c.f. p.45)

▼ 「理想的」コミュニケーション = 「文字通りの意味」に基づいて「記号使用者」にとっての意味が決定される。

▼ 「理想的ではない」コミュニケーション = 「記号使用者」にとっての意味が、「文字通り」の意味を変容させる可能性あり。

→ 「『人間』という項が関与することによって、『コード』を超えるという可能性が導入されるわけである」 (p.64)



⇨ 「ハンプティ・ダンプティ」

もともとはイギリスの古い童話「マザー・グース」に登場するキャラクター。『アリス』でも登場する。擬人化されたタマゴの姿で描かれる。『鏡の国のアリス』(1871)は、『不思議の国のアリス』(1865)の続編。ルイス・キャロル原作。